

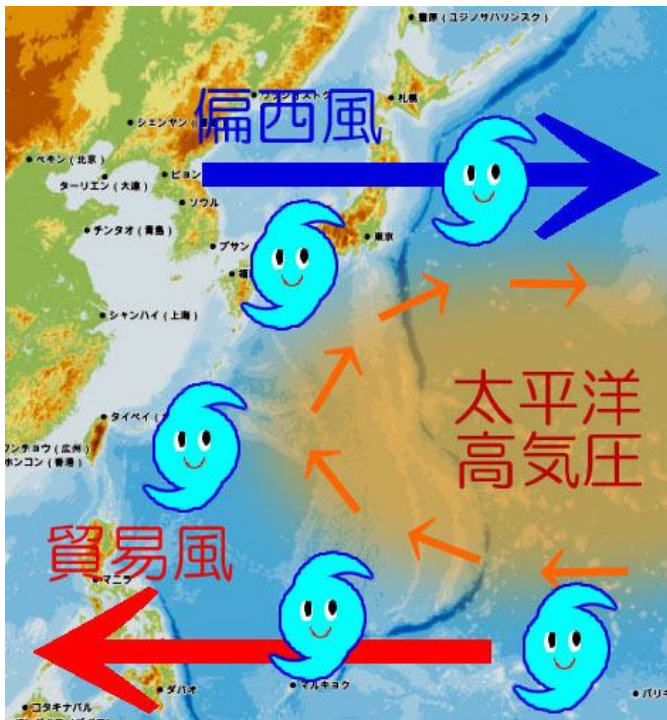
「台風12号と寒冷渦(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「日本列島付近では、雨雲は西から東に移動する。だから天気も西から東に移ることが多い」これは、5年生の理科の教科書にも載っている、いわば「常識」の一つです。台風も、普通は列島に近づくと、西から東に移動することが多いです。

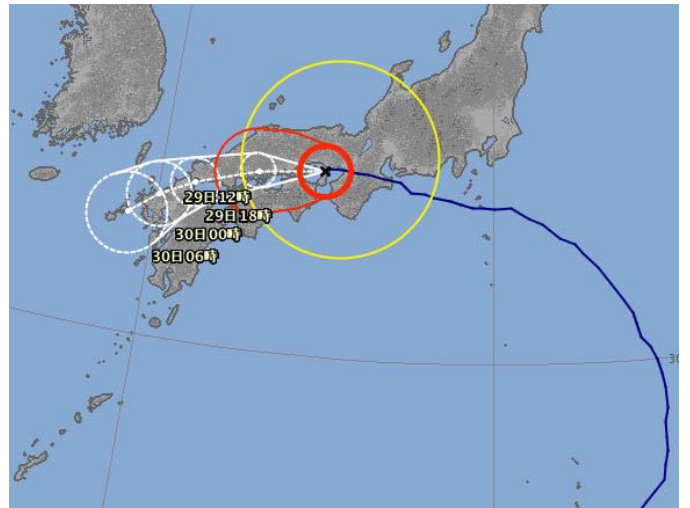


台風は「風を乗り換えて」移動する

赤道付近で発生した台風は、最初貿易風(東風)に乗って、西よりに移動します。次に、太平洋高気圧の時計回りの流れに乗って、北よりに進路を変えます。列島付近まで来ると、今度は偏西風(西風)に乗って、東よりに向きを変えるのです。

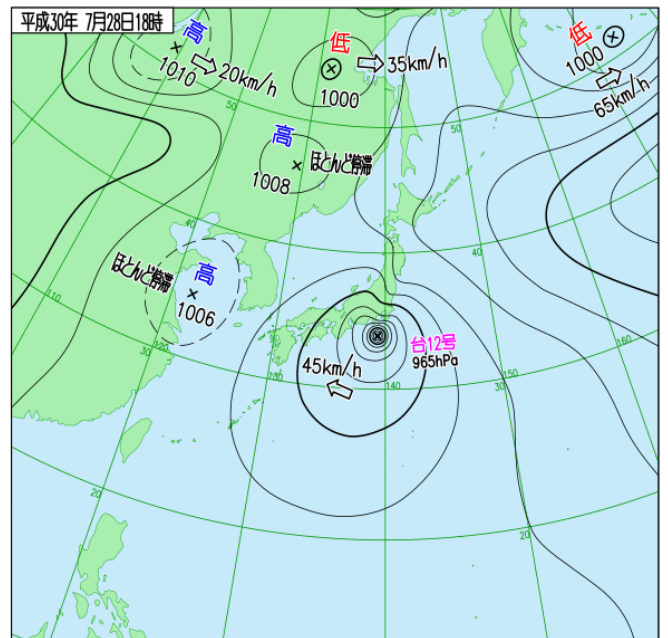
台風自身には「動力」はありませんが、このように、いくつもの風を乗り換えながら、台風は「逆つ字型」の進路をとることが多いです。

台風の進路が、それぞれの台風や季節によって異なるのは、偏西風の強さや蛇行の有無、太平洋高気圧の強さなどに依存します。太平洋高気圧の勢力が強いと、台風は外よりの進路をとり、日本海へ抜けることもあります。偏西風への乗り換えができず、そのまま中国大陸に上陸する台風もあります。



ところが、2018年7月下旬の「台風12号」は特別でした。「異例」でも「異常」でも良いと思います。通常の「逆つ字型」の移動ではなく、「つ字型」に移動したのです。気象の常識では考えられない進路なのですが、そのように予報され、事実その通りに進みました。太平洋高気圧や偏西風は、一体何をしていたのでしょうか？

今回の台風の報道で、よく耳にした用語が「寒冷渦」という言葉です。見るからに(聞くからに)寒そうな渦です。その寒冷渦なるものが、本州南岸に存在し、それが台風の進路を「つ字型」にしたというのです。



図は7月28日18時の天気図です。本州に接近しつつある台風の本体ははっきりと描かれていますが、本州の南岸には、等圧線の顕著な変化はなく、寒冷渦らしきものの存在は確認できません。天気図に現れないほど局地的な気象現象なのでしょうか？いや、そうではありません。実は大規模な大気現象なのです。